水路で見る白石

4年　田中（たなか）　真誉（まよ）さん

水のまちといわれる白石では、随所でさらさらと音を立てて流れる水に出会うことができます。今回の展示では、「水と人のつながり」をテーマに、白石の水路について発表しました。市内のどこを水が流れているのか調べてみたところ、水路は網の目のように張り巡らされ、今もまちに水音を届けています。市民の皆さんにとっては「当たり前」の風景になっている水路網は、古くから人々の生活に寄り添い支えてきました。

今でも水路は、毎年送り盆の季節になると、沢端川の桜橋上流から灯篭を流し、幻想的な夜の水辺を見せてくれる「流灯会（ながしとうえ）」や、年に2回、春と秋に川を干し上げて清掃する「川干（かわひ）」など、魅力あふれる行事で彩られ、守られています。普段から自然の水に親しむことが少なくなった現代ですが、白石には全国的にも貴重な習慣が生き続けています。

沢端川をはじめ、白石市内を縦横無尽に走る水路が、いつ、誰の手によって作られたのかは、はっきりとしませんが、城と城下町の整備は同時期に行われていたことや、城下町を作るに当たっては水路の整備も不可欠なことから、その歴史を推測することはできます。

元は山城であったとされる白石城を、城下町を備えた平山城に改築したのは、蒲生氏（がもう）であったといわれています。それに合わせ、城を守る堀、また、生活や農業、防火用水として、舘堀川をはじめとする水路網も整備されたのではないかと思います。

その後、関ヶ原の前哨戦として、伊達政宗（だてまさむね）が白石城に攻め入った「白石城合戦」が決着すると、白石は片倉家が治めることになりました。多くの家臣団を住まわせる城下町とするため、まちや水路網は、さらに拡張、整備されていったようです。城主が変わるたびに造成、拡張されていった水路は、現在に至るまで市民の皆さんの生活に寄り添って流れ続けてきました。

白石は昔から水害の多いまちでした。伝わる話では、台風が来ると白石川が氾濫し、大雨が降ると市内の水路は冠水しました。この堰を再建する工事の労力は大変なもので、人々を苦しめていました。

多くの苦労を経てまちまで引かれた水路では、上水道整備前まで、洗濯、米とぎ、風呂水汲みが行われました。そして、夏になると子どもたちの格好の遊び場でした。また、「川干」のときには、泥さらいや護岸の修復が行われると同時に、子どもだけではなく大人も川に入って、小魚捕りを楽しんだといいます。「川干」が始まった時期は諸説ありますが、江戸時代前期から続いているともいわれています。

今も清掃が行われる時は、早朝にもかかわらず多くの市民の皆さんがボランティアで参加しています。特に、鯉を捕獲して生け簀（す）に移す時は、集まった人たちから大きな歓声が上がるなど、活気あふれる魅力的な行事になっています。

上下水道が完備し、川と生活とのつながりが薄れた今でも、「川干」の時には必ず、地域の人々が誘い合って参加しています。水路への思いの深さとともに、白石の人々の「絆」を感じます。

2年間の成果として強く感じていることは、「水路は人を守り、人は水路を守る」ということです。そして、水路の歴史を調べて見えてきたのは、今なお共存を続けている「人と川」の姿です。

水とともに歩んできた白石には、魅力的な資源がたくさんあります。白石に息づく水の歴史の豊かさを市民の皆さんにも再認識していただき、これからも守り続けてほしいと思います。白石の活性化に、「水のまち白石」を取り入れたイベントなどを行っていただければとてもうれしいです。

白石城大戦略

3年　半谷俊太郎（はんがいしゅんたろう）さん

日本人ならほとんどの人が知っている「関ヶ原の戦い」。この戦いが行われる少し前に、白石城を舞台に「関ヶ原の戦い」の勝敗を決めた「白石城合戦」が行われたことを知る人は、少ないのではないかと思います。

私が見つけた白石は「白石城大戦略」です。もともと戦国武将が好きで、片倉小十郎をいろいろと調べていたら、「白石城合戦」のことを知りました。

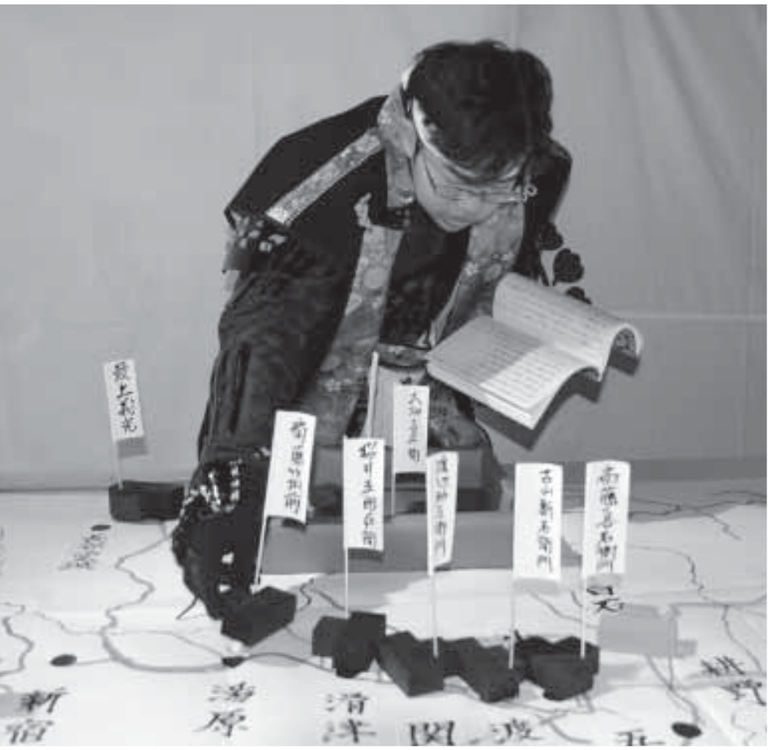
「白石城合戦」とは、石田三成（いしだみつなり）率いる西軍の上杉氏（うえすぎ）と、徳川家康（とくがわいえやす）率いる東軍の伊達氏が激突した関ヶ原の前哨戦です。その直前、上杉の拠点である白石城と米沢を結ぶ重要な幹線である七ヶ宿街道が、刈田郡の村々に住む野伏（のぶし）によって封鎖されました。白石城と米沢の間の連絡が途絶えたことが戦の勝敗を決定付けましたが、なぜ野伏たちが上杉領民でありながら伊達氏に味方したのでしょうか。

これにはその昔、伊達氏が七ヶ宿一帯を支配していたことなどが背景にあります。つまり、この地域はかつて伊達氏の領地で、野伏たちもその領民だったのです。このような縁で彼らは伊達氏に味方をしました。

同様に、旧伊達領であった奥州街道五賀村の近くで、野伏と上杉勢との戦闘が起こったことで会津から白石への移動もできなくなりました。このような動きによって白石城は孤立無援の状態となり、本格的な戦闘を行う前に勝敗が決していたといえます。

「関ヶ原の戦い」、そして、「白石城合戦」に至るまでの経過の中で、野伏が重要な役割を果たしたことを武将たちの動向やそれぞれの軍の動きと合わせて説明したことで、市民の皆さんから「分かりやすく、とても新鮮でした」と声を掛けられ、とてもうれしかったです。

これからも、白石城攻めの後の動きやかかわりのあるほかの地域の重要な戦なども調べていきながら、好きなことを掘り下げ、「知ることの楽しさ」を表現し、みんなに伝えていきたいと思います。



▲ゼミのみんなと何日もかけて和紙に描いた絵図の上で兵棋を動かす半谷さん

知れば知るほど好きになる―

尚絅メディアフェスタは、尚絅学院大学が平成20年から文部科学省の補助事業を活用してスタート。本市での開催は、平成21年～22年の予定であったが、学生と地域の協働を学ぶ場として、これまでの市民の皆さんの協力などが評価され、本年度も引き続き白石を舞台に開催されることになった。

今年のテーマは「発表します！　私たちの見つけた白石」。学生たちは私たちの普段の生活の中で何気なく過ごしている風景の中から、新たな視点で文化資源を創り出そうと、幾度となく白石を訪れイベントに参加したり、市民の皆さんと語り合ったりした。そして、それぞれが見つけた白石の魅力をさまざまな形で表現した。

壽丸屋敷で「水と白石」をテーマに発表を行った田中さんは、「初めはテーマを見つけるために白石を歩き回りましたが、たくさんの人に出会い、白石のきれいな川が好きになって30回ほど白石に通いました」と話した。

「白石城大戦略」をテーマに発表した半谷さんは、「400年前の白石に興味がわいて調べ始めましたが、知れば知るほどおもしろくなって、片倉小十郎、そして、白石が好きになりました」と目を輝かせていた。

きっかけは何でもいいのかもしれない。学生たちの入り口は、大学の授業だった。それでも学生たちは、自分たちの意思で行動し、行動の中で生まれる出会いを大切にした結果、「人の出会いが宝」ということに気付き、「知ることのおもしろさ」を楽しんだ。そして、「知れば知るほど好きになる白石」と話してくれた。

何気なく過ごしている風景の中にある白石の物語。自分の足で歩いてみてわかる白石の風情。変わらないもの。変わりゆくもの。

白石の新しい顔を見つけたり、遠い過去に思いを寄せたり足のむくまま白石歩き。そこには、新たな驚きやうれしい発見が私たちを待っているだろう。

今日はどこを歩こうか。私たちが住むまち白石は、宝でいっぱいだ。